

多文化社会における日本語再学習の動機と意味

—カナダ成人初級継承語学習者の事例から—

REASONS AND MOTIVATIONS FOR RE-LEARNING JAPANESE IN A
MULTICULTURAL SOCIETY: A CASE STUDY OF AN ADULT BEGINNER-
LEVEL JAPANESE HERITAGE LANGUAGE LEARNER IN CANADA

脊尾泰子, マギル大学

Yasuko Senoo, McGill University

1. はじめに

グローバル化が進み、日本語学習でも学習形態や背景の多様化が目立つようになってきた。そのような多様化の現れの一つが成人初級継承語学習者の増加であろう。近年、大学の初級コースで、幼少期に日本語学習を断念した日本にルーツを持つ学生が、再度日本語学習に取り組もうとする姿を見かけるようになった。国際社会に対してカナダが多文化・多言語主義を明示してから久しく、2011年の国勢調査では総人口約3300万人のうち約64万人が母語が二言語以上であるという結果が得られている（カナダ統計局, 2011）。しかし、ケベック州などフランス語の地位の高い（州の公用語が英語ではない）地域では、国の公用語である英語・フランス語二言語の習得の重圧から、継承語となるそれ以外の言語の習得を断念する家庭も多いようである。特に日本語については、第二次世界大戦中の抑留の歴史も影響し、日本人は国内での異民族間婚姻率が最も高い民族集団とされており（カナダ統計局, 2009）、古くからの日系カナダ人の間でも言語の継承が途切れているという背景がある。本発表は、そのような現状を踏まえ、成人初級継承語学習者の再学習という一つの可能性を探ったものである。カナダ・フランス語圏の大学で初級コースを受講した一人の継承語学習者を対象に、再学習に至った軌跡と学習経験に焦点を当て、以下の二点について調査・考察した。1) 大学で日本語学習を再開したのはなぜか、2) 再学習に至るまであるいは再学習の中で何に抵抗や不安を感じているのか。

2. 先行研究

継承語学習者の学習動機については、これまでの先行研究で外国語学習者と異なる点が見られると報告されている（Noels 2009, Dressler 2008 等）。学習者の中で動機の「内在化」（社会的価値が学習者の内的な価値に影響を与えていく過程など）が起こっており、その変化の段階に連続性があるとする自己決定理論（SDT）を元にした Noel (2009) では、継承語学習者の学習動機は外国語学習者に比べ、「内在化」の最も進んだ「統合的調整」段階にあるものが顕著であったとされている。また、カナダ中部の大学のドイツ語学習者を対象にした Dressler (2008) では、外国語学習者の「統合的動機づけ」が時間の経過によって弱まるのに対し、継承語学習者のそれには変化が見られないという結果が得られている。しかし、多くは幼少期からの継続的な学習者が対象であり、再学習者についての調査は未だ十分ではない。

また、アイデンティティ研究では、アイデンティティ構築の過程を個人が置かれた特定の時間や場所で意識的または無意識的に自己や他者を位置づけし、常に新しいアイデンティティを作り出すものとするポスト構造主義的アプローチから継承語学習者のアイデンティティ構築を理解しようとする研究やフレーム・ワークの提案が近年多く見られる (Rampton, 1990; Dressler, 2010; Kondo-Brown, 2000 等)。しかし、川上 (2014) は、近年北米の多くの研究が学習動機やアイデンティティを「想像共同体」への将来の十全的参加の為の「投資」 (Norton, 2000) という面から捉える傾向にあることに触れ、大人になってから移動したり学習を始めたりする移民と異なり、幼少期から複数言語環境で成長してきた学習者の特徴や葛藤・不安は、その捉え方だけでは十分に理解・議論することはできないとしている。

3. 調査の概要

今回の調査はカナダ・フランス語圏 (ケベック州) の大学に通う初級継承日本語学習者 1 名を対象に 2011 年 9 月から 2012 年 1 月にかけて行なった。調査協力者は、スイスで生まれ、その後幼少期から現在まで調査地で育ってきた英仏バイリンガルである。日本語については幼少期にその習得を断念し、大学入学後に日本語学習を始めている。データ収集時には、アングロフォン (英語母語話者) ・英語系カナダ人であり、同じ日本語学習者である CEGEP (日本の高校 3 年と大学 1 年にあたる教育機関) からの恋人とその家族と同居していた。

表 1 調査協力者の背景

調査協力者 (仮名)	年 性	家族	使用言語	学習言語	日本語学習歴
Mayumi	23* 女	父親 (日系 3 世) 母親 (日本人) 妹二人	英語 (家庭) 仏語 (学校)	仏語 西語	成人向コミュニティ クラス (初級・5 か月) 大学夏季集中コース (初級・10 週間)

*調査当時の年齢

調査地であるケベック州は州の公用語をフランス語のみとしたフランス語圏であり、1977 年のフランス語憲章 (Bill 101) の制定により、特別な例を除き、州民は基本的には公的義務教育をフランス語で受けなければならないとされている。調査協力者の居住する都市は、カナダ移民の定住先として人気の高い地域であるものの、日系人の数は少なく、一定の生活区域を共有する物理的な日系コミュニティは存在しない (Yoshida, 2001)。

データは、背景調査アンケート、日本語に関する日記 (22 日分)、インタビュー (音声記録は最初と最後の 2 回のみ) を通して集めた。第 1 週目に背景調査と半構造化インタビュー、第 2 週目から第 12 週目まで週一回のインタビュー (1 回 30 分~2 時間)、第 14 週目に事後の半構造化インタビューを行なった。イン

タビューとインタビューの間に日本語使用・学習にまつわる経験をしたり、思い出したりしたことを Google document を使った日記に自由に書き留めておいてもらった。主にこの日記の内容を元に次のインタビューの質問やテーマを準備するようにした。日記・インタビュー共に英語で行い、対話的アプローチを使用した。対話的アプローチは「調査者と調査対象者のポジション転換の手段」(Jones & Martin-Jones, 2000, p.326)であり、両者の知識生産における共同作業を可能にし、より個々の真実に近い知識が得られると考えられている。日記やインタビューはこのアプローチでは既存の情報を収集するための手段ではなく、その過程自体が知識生産、知識構築の場と見られており、調査者の声も含まれるべきとされている(Kvale & Brinkmann, 2009)。本調査でも調査者はインタビューや日記の中で、調査協力者のコメントに対してフィードバックを残したり、自身の経験を共有したりした。また、調査協力者は現在日本語との接触が少なく、幼少時の記憶も薄れていたため、日本語に関わるエピソードを引き出す材料として、日本語多読教材(レベル別日本語多読ライブラリー, レベル1, ASK 出版)を使用し、インタビューとインタビューの間に個人読書(約週1冊)を促した。

データは、1) 大学で日本語学習を再開したのはなぜか、2) 再学習に至るまであるいは再学習の中で何に抵抗や不安を感じているのか、という2点に注目し、以下の手順で質的に分析・考察した。1. キーワードをリストに書き上げる。2. キーワードのリストから浮かび上がったものをテーマとして設定する。3. データを見ながらテーマごとにコードを作る。4. 内容ごとに細かく分断した文章にコード(ラベル)を付け、表にする。5. 表全体から浮かび上がった特徴を書き出し、文章化する。データ収集の対話的アプローチの特徴を考慮し、分析の際には、インタビューや日記の中で双方が互いにどのようなポジションを取っているのか、相手にどのように自分を見せようとしているのかという点にも注目した。

4. 結果

4.1. 再学習の動機

調査の結果、今回の調査協力者 Mayumi のケースでは再学習の動機については、日本語を通しての新しい人間関係の構築、旅行者としての日本滞在といった幼少期とは異なる自立しようとする一人の大人としての経験が影響していることが明らかになった。

4.1.1. 現地社会の中での自身の位置づけ

Mayumi は、高校や CEGEP の時期に日本語・日本(人)らしさというものについて考え、行動しなければならないことが多かったようである。その時期になると現地のフランス語系カナダ人・英語系カナダ人の対立の場に遭遇することも多くなった。そのような場面で「私は日系カナダ人だから」と言えば、それは「Charm/Safety[お守り]」(インタビュー, 2011年9月28日)のような役割を果たし、どちらのグループの友人も彼女が中立的な立場を取ることを認めてくれたと述べている。一方、言語能力の面で英仏バイリンガルであることから、時と場合によって自由にフランス語系カナダ人のグループにも英語系カナダ人のグル

ープにも帰属することができ、疎外感を感じなかったと語っており、グループ間を移動する方法や力を成長期に見だし、身につけてきたと見られる。また、自分の置かれている環境から「カナダ（人）らしさ」「日本（人）らしさ」といったものには、さまざまな側面や度合いがあるという見方もこの時期に形成されていったようである。

My mother has, I guess, given me a lot of her heritage. But it wasn't like, "oh this is the Japanese way." It was like, "this is how things should be." So, I can't really say that certain things I feel are specifically Japanese. I just know that that's how my mother brought me up, that's how I know. When someone asks me like "do you really live in a very Japanese household?", I cannot really say "yes" or "no" because that was my parents' household, and I know that it is different from what I have seen in Japan, but also it's different a lot from what I've seen in Canada. It's my parents' household.

(インタビュー, 2011年9月28日)

家庭生活のあり方、家庭での価値観やものの見方には、家族の中で引き継がれている部分とともに社会から影響を受けている部分もある。しかし、個々の家庭によってどの程度どの部分に影響を受けるかは異なってくる。彼女の家庭では複数の文化あるいは社会の影響を受けており、何を良しとするかは彼女の父母が選択し作り上げてきたものである。彼女から見れば、そこに日本的要素やカナダの要素が含まれていることは推察できるが、どの部分がそうであるかということとは分からない。ある面から見れば日本的であるし、別の面から見ればカナダ的である。また、そこにはどの程度日本的あるいはカナダ的かという度合いの問題もある。頻りに周りから「家は日本ぽいのか？」という質問を投げかけられる中で、「日本らしさ」「カナダらしさ」をあるかないか、単純に Yes/No で表すことはできないという考えに至ったようである。Mayumi は、そうした「らしさ」に対する考え方や帰属するグループを場面によって移動する（複数のメンバーシップを使い分ける）力を使うことで、置かれた環境の中である程度自分が納得できる（不快に感じるものが少ない）ポジションや居場所を作ってきたと見られる。

しかし、そのような彼女の自身の位置づけに対する試みが現地社会で常に受け入れられ、成功してきたわけではないようである。

Once he [the 'stranger' who asked her where she is from] knows I am Japanese, it's like, some people feel like that some intimate knowledge and suddenly they know a whole bunch of you, like the fact that you do martial arts, you got of kimono, that you got this concept of honour. They associate all of that to the fact that I have Japanese ethnicity, and I am sure they are thinking... [...] Because, because, sometimes they say, "I think we can learn a lot from each other." Because I am Japanese? Uh, ok... [...] even if that's true, that's kind of rude, I think, that assumptions made. In a sense, I guess this is fluttering in a way but it's, I am Canadian too. (インタビュー, 2011年9月28日)

アジア人的外見や日本名から町の中で見知らぬ人に「どこから来たの?」と聞かれることが多いが、そのような場面で正直に「カナダ人である」と答えてもそれは受け入れられないという。「日本人」というエスニシティが明らかになるまでやり取りは続き、彼女がそれを認めるや否や見知らぬ人はまるで彼女のすべてを知っているかのような態度を取り始めるということを具体的な経験談から語っている。このような場面について更に日記の中で振り返り、自分の感じたことや考えを次のように分析している。

In Canada, I feel like the question [where you are from] is prying and at times indecent. I find myself dodging the answer. Perhaps it is due to the attitude of the people who are asking. I don't really mind when the person asking is a friend or another Asian. I feel like they are simply curious and are extended the right for me to ask the question as well, if I wish. I do mind when it is a stranger. Then I feel like they are thinking that I am some sort of exotic animal that they want to know more about. (日記, 2011年12月12日)

友達や親しい人々の輪の外では、往々にして日本人であると同時にカナダ人でもあることが認められず、個人としてのユニークさが無視され、戸惑うことが多いようである。対等な付き合いの相手としてではなく、興味の対象として見られていることに居心地の悪さを感じている様子が窺える。

4.1.2. 新しい人間関係の構築と再構築

このような環境の中、フランス語系の高校から英語系 CEGEP に進学し、そこで似たような背景を持った人たち（英仏バイリンガルで他の言語も話せる、あるいは話せることを期待されている複数の文化の中で育った人たち）や英仏バイリンガルではない人たちなどに出会う。恋人の Mike もその一人で、英語モノリンガルで年長の兄には日本人の恋人がおり、フランス語よりも日本語を学習することに興味を持っている。そのような人たちとの新しい関係は対等なもので、カナダ人として認められ、彼女の個性が無視されることもなかったようである。

She [Mayumi's mother] doesn't like excess of interest shown to it [Japanese ethnicity or Japanese]. I was little worried and I feel that a bit too. I think I got a little bit of conflux. I worry that someone is interested in me because I am Japanese not because of who I am because that happened before. So yeah, I have a little bit of unease when it comes to that, but because I trust Mike and his family be the way the enthusiasm shown I knew it was about the place not because of me in anyway. (インタビュー, 2011年9月28日)

ヨーロッパや南米をルーツに持ち、外見から「どこから来たの?」と聞かれることのない Mike に対して、「Joke in a sense. [...] technically, I am more Canadian than he [Mike] is if we go get background wise. But it doesn't show.」(インタビュー, 2011年9月28日)と述べており、対等な関係が築かれていることが分かる。日本や日本語に関しては「近い将来日本に行くことを夢見ている日本語学習者同士」という立場で向き合うことができ、この出会いが Mayumi の中で新しい「日本語

学習者」というアイデンティティをグループ間移動の選択肢の一つ、また「カナダ（人）らしさ・日本（人）らしさ」の一部として構築していく元となったようである。

4.1.2. 旅行者としての日本滞在

Mayumi と Mike は、大学生になり成人として日本語のコースを受講する前（2009年5月～6月）と大学卒業後（2011年11月～12月）の二度一緒に日本に旅行している。一度目の旅行で自身の位置づけに対する反応がカナダ（ケベック州）の人々と日本の人々とは違うことに気づいた様子がインタビューや日記のエピソードの中に表れている。

I do feel a little embarrassed that I do not speak more, but I am proud of what I can do. This is very different from when people ask me the same question while in Canada. (日記 2011年12月12日)

日本で「どこから来たの?」と聞かれた時は、カナダで聞かれた時と違い、日本語が十分に話せないことが多少恥ずかしいと思うものの、自分が今できることについては自信が持てるとしている。後の日記で、この違いは質問をする人々の態度の違いにあると述べている。日本ではアジア人的な外見だけに拘らず、しぐさや服装などからも判断されるため、Mayumi の「カナダから来た」という答えがそのまま受け入れられ、それ以上詮索されることはなく快適であったという。自身の位置づけが認められたことで、旅行前に感じていた日本語能力やそれへの周りの人々の期待に対する不安も薄らいだようである。また、日本では彼女の日本語使用に対する努力が評価されることが多かったとしている。

My experience (last time we went to Japan) was that people were very happy to see Mike and I try to speak Japanese, even if I am sure it sounded terrible and wrong. It is very nurturing, in that sense. (日記, 2011年11月4日)

更に日本語が上手く話せないことが分ると、人々は彼女や Mike とともに旅行中の予期される不便さを心配し、困ることがないように助けてくれたという。このような対応はカナダ（ケベック州）でのフランス語学習者に対する対応とは異なるとも語っている。

そのような日本での旅行者（カナダ人）としての経験から、「日本に関わるものを部分的に親から継承したカナダからの日本語学習者」で「複数言語を学ぶ意欲と能力を持った人」として自分を位置づけることが可能であり、そのポジションが快適なものであるということに気がついたのではないだろうか。日本への一度目の旅行後、Mayumi と Mike は Mike の家族と共にコミュニティの日本語クラスに通い、更に大学の日本語コースを受講することになった。

4.2. 再学習に対する不安・抵抗

親や家族から離れたところで新しい人間関係を築いたり、日本旅行など新しい経験をしたりすることで、日本語再学習に対するきっかけや意欲は生まれたが、

再学習を進める中で葛藤や不安もあったようである。インタビューや日記の中で繰り返し語られたエピソードには、文化的概念の理解の難しさ、学生や社会人としての生活全体の中での日本語や日本語学習者である自分の位置づけの難しさが表れている。

4.2.1. 文化的概念の理解に対する周囲の期待

Mayumi が家庭で母親から学んだ日本の文化的概念の中に「義理」がある。その言葉の意味や感覚は彼女なりに理解しており、説明も出来るが、それでも「義理」が存在する場面に遭遇した時、彼女にとってそれは複雑なものでどうしたらよいか分からなくなるという。

I think my mother calls it “ぎり [giri]” and it has been the source of much anguish and stress in my life. It is not a bad thing per se, as it has taught me the concept of being grateful, but I do think that there are some senses in which “ぎり [Giri]” becomes quite sinister. (日記, 2011 年 10 月 23 日)

例えば、親戚付き合いについて Mayumi の感覚では頻繁に訪ねあうことが家族や親戚としての義理を果たすことであるが、彼女の母親の感覚では親戚の間で訪ねあう時にはおもてなしや贈り物などを交わす暗黙のルールのようなものが存在し、それをきちんとやらなければ義理を果たしたことはない。あまり頻繁に訪ねるのは相手にも負担をかけることになる。つまり、Mayumi にとっては訪ねないことは不義理であるが、母親にとっては思いやりなのである。このような感覚の違いは彼女に日本語や日本文化を学ぶ上で不安や戸惑いを与えることもあったようだ。しかし、二度の旅行者としての日本滞在を通して、周りの人々の期待は母親に対するものと自分に対するものとは違うことに気づき、そこに妥協点を見いだしている。

Because of the “*giri*”, and like maintaining family relationships, it’s complicated. Because I’m Japanese Canadian, but my mother is Japanese, and like my cousin’s family is Japanese. So what is expected from me is maybe different from what is expected from my mother, and my mother, what she expects of herself is different, too. And if my mother tells me that she doesn’t want me to go see her, her sister, then you know, I feel like I want to meet my family, but I also feel like I’m not supposed to because she doesn’t want me to. (インタビュー, 2012 年 1 月 11 日)

There is something I don’t really understand. There is something I am really glad that I don’t really have to deal with frequently. Like, I am very happy to be Canadian with Japanese heritage because it gives me a perspective on Japanese culture, but also gives me appreciation for what I commonly have in Canada. Of course those go the other way around. Something like, “I wish I had that in Canada. Why people are so mean here?” (インタビュー, 2012 年 1 月 11 日)

母親と同じでなくてもよいと考えることで、自身を「部分的に日本に関わるものを継承したカナダ人」であるとし、それを肯定的に捉えることができるようになったようである。これは親からの自立と新たなアイデンティティの構築を表しているのではないだろうか。

4.2.2. 生活全体の中での日本語・日本語学習者の自分の位置づけ

Mayumi が再学習の中で難しく感じることの一つとして、学生・社会人としての生活全体での日本語あるいは日本語学習者としての自分の位置づけも上げられる。日本語学習者の自分は彼女にとって納得のいく快適なものであるが、それが彼女のすべてではない。日常生活では、生物学に関係した仕事に就くことを目指している大学生（卒業生）であり、生活のためにリサーチアシスタントのアルバイトやボランティアをする社会人でもある。その中では日本語は必ずしも必要なものではなく、敢えて努力しなければ日本語学習を続けることはできない。コース修了後、日本語学習者としての自分を現実の社会生活の中でどこに位置づければいいのか、やるべきことの優先順位はどのようにつけるべきなのかといったところで、時間調整をし、バランスをとることが難しくなると述べている。そのような状況について、以下のように自分の心境を説明している。

I don't think they [all the Japanese she learned] are all gone. We learned it once, we can learn it again, but I think it's, it could be hard, hard because you know that you did know and you should.... So it's like a mixture of guilty and embarrassment.

(インタビュー, 2011年9月28日)

日本語再学習を通して構築・再構築してきた（変化してきた新しい）自分を、現在置かれた環境・社会の中でどのように位置づけていくのかが今後の課題となるだろう。

4.3. 現状と展望

Mayumi は、再学習を始めてから自分の日本語能力の上達を感じることが出来るようになり、日本語使用者としての逞しさが身に付いたと話している。以前は不安であった日本語使用場面も今では「楽しいテスト」と感じるようになったという。日本語コース修了後（大学卒業後）の二度目の日本旅行では、母方の叔母との日本語・英語を混ぜた会話の中で、自身の日本語学習の軌跡を振り返っている。

I thought that I know that my Japanese is... isn't high up to the conversation, normal conversation with my aunt. But I do know that my Japanese got lots better since the last trip. So I'm not ashamed of...of my level of Japanese... and proud I progressed this far, and I'm also proud that I was able to being more gutty about using my Japanese, ... still kind of embarrassed about it, but you know, like, it's like "I did it. That's good." It's how you learn. So, I, ...I know that I still have work to do, but I also know that I came this far. So in that sense, I know that she does know that too.

(インタビュー, 2012年1月11日)

二度目の旅行での叔母や日本の人々との日本語を通してのコミュニケーションが日本語学習への更なる意欲に繋がっていったようである。また、日本語学習者としてどのようになりたいかという具体的な目標もでき、日本の人々から

「capable Japanese-speaking tourist」と見られたいと語っている。一方、複数言語話者、あるいは一人の人間としてどうありたいかというイメージにも具体性があり、「英語・フランス語学習者に『なぜ英語・フランス語が話せないのか?』と聞くのではなく、(日本の人々が日本語学習者の自分にくれたように)自分の方から歩み寄り、手を差し伸べられる英仏バイリンガルでありたい」ということを旅行中の日記や帰国後の事後インタビューで述べている。

更に、日本語学習を断念した過去について、大人として自らの意思で学習を再開した今、自分の思いや考えを以下のように語っている。

Now that I am old enough tobe confident in myself and also what my mother chose to teach us. I feel like it was her choice, and it was our choice as children not to push on it so although those people [think that her mother should have taught her Japanese more forcefully]. (インタビュー, 2011年9月28日)

さまざまな経験を通しての人としての成長に伴い、日本語や日本語学習に対する考え方、親や自分、その関係に対する認識・見方も変化してきたのではないだろうか。今後も新たな経験や環境からこれらの考え方や見方は変化していくであろうが、自分の位置づけという意味では、これまで学び実践してきたように、新しい経験をするたびに交渉・妥協を繰り返し、自分なりにある程度納得のできる快適な場を作り出していくのではないかと考える。

5. まとめ

調査の結果から、現地の人々との関係・日本の人々との関係・現地での日本文化も含む移民の文化の継承についての考え方(ルーツやエスニシティへのこだわり)・文化的概念の理解など学習者個人のさまざまな経験が再学習の動機に影響していることが分かった。それらの経験は、学習者自身が一人の大人として自立していく過程の一部であり、突発的あるいは一時的で特別なイベントが直接的に再学習の動機に繋がったわけではない。また、再学習に伴って起こる日本語学習者としてのアイデンティティ構築の難しさも明らかになった。明らかに学習者であると分かる教室内と違い、教室外では「日本人」と見られ、学びあう仲間、「日本語学習者」として認められにくいこと、日本で育った親から継承しているものは多いが、周囲からの期待は親と自分とは違うという家庭内での自分の位置づけと社会での位置づけに差があることなどが、日本語学習者としてのアイデンティティ構築を複雑にしていると考えられる。

6. 今後の課題と展望

今回の調査を更に深めていくために今後、調査者と調査協力者との対話も分析・考察し、同一地域でより多くの事例を一つひとつ丁寧に分析・記録していき

たい。また、再学習の可能性を広げ、支援のあり方について考えるためには、単に成人言語学習あるいは継承語学習として捉えるのではなく、発達心理学などの分野からのアプローチも含め、人としての成長や発達も考慮した生涯学習のような視点からの調査・研究が将来的には必要であると考え。一方、教育現場では再学習者の日本語学習者としてのアイデンティティ構築の支援の方法、文化的知識の伝授に留まらず文化的概念の理解やその実践（日本語を使う環境に置かれた時、個々の学生が周囲から期待される理解や行動はどのようなものなのか）に関する学習の方法を考えていくことが重要ではないかと考える。

参考文献

- 川上郁雄 (2014) 「第 1 部第 5 章ことばとアイデンティティ—複数言語環境で成長する子どもたちの生を考える—」宮崎幸江 (編) 『日本に住む多文化の子どもと教育—ことばと文化のはざままで生きる—』上智大学出版 117-144
- Dressler, R. (2008). *Motivation and demotivation in Heritage Language Learners of German*. M.A. dissertation, University of Calgary (Calagry), Canada.
- Dressler, R. (2010). "There is no space for being German": portraits of willing and reluctant heritage language learners of German. *Heritage Language Journal*, 7(2), 1-21.
- Jones, K., & Martin-Jones, M. (2000). *Multilingual literacies: reading and writing different worlds*. Philadelphia, U.S.: John Benjamins.
- Kondo-Brown, K. (2000). Acculturation and identity of bilingual heritage students of Japanese in Hawaii. *The Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism*, 6, 1-19.
- Kvale, S., & Brinkmann, S. (2009). *InterViews: learning the craft of qualitative research*. California, U.S.: SAGE.
- Noels, K.A. (2009). The internalisation of language learning into the self and social identity. In Z. Dornyei and E. Ushioda (eds) *Motivation, Language Identity and the L2 Self* (pp. 295-313). Bristol, U.K: Multilingual Matters.
- Norton, B. (2000). *Identity and language learning: Gender, ethnicity and educational change*. Harlow, England: Longman/Pearson Education.
- Rampton, M. B. H. (1990). Displacing the 'native speaker': expertise, affiliation, and inheritance. *ELT Journal*, 44(2), 97-101.
- Statistics Canada (2009). Population by mother tongue and age groups, 2006 counts, for Canada, provinces and territories. Retrieved December 30, 2010, from <http://www12.statcan.gc.ca/census-recensement/2006/dp-pd/hlt/97-555/T401-eng.cfm>
- Statistics Canada (2011). Population by mother tongue and age groups, 2011 counts, for Canada, provinces and territories. Retrieved January 6, 2015, from <http://www12.statcan.gc.ca/census-recensement/2011/dp-pd/hltfst/lang/Pages/highlight.cfm?TabID=1&Lang=E&Asc=1&OrderBy=1&View=1&tableID=401&queryID=7&Age=1&PRCode=61>
- Yoshida, R. (2001). *Political economy, transnationalism, and identity: Students at the Montreal Hoshuko*. Master's thesis, McGill University (Montreal), Canada.